

プログラムノート チェコ音楽の夜明け ～スメタナとドヴォルザーク、魂の共鳴～

かんばらひとし

歌劇『売られた花嫁』序曲～スメタナが築いた「チェコ国民楽派」の礎～

19世紀後半のチェコは、ハプスブルク帝国（オーストリア＝ハンガリー帝国）の経済的中心地として急速な工業化を遂げる一方で、チェコ人とドイツ人による激しい民族対立の舞台でした。

ドイツ語が公用語の中、チェコ語による本格的なオペラなど不可能だという世の偏見を覆し、スメタナは歌劇『売られた花嫁』作曲。これは「チェコ独自の芸術音楽の誕生」を世に告げた記念碑的作品です。その序曲は、チェコの農村の活気とお祭りの喧騒をそのまま音楽に落とし込んだような弾むリズムと輝かしいエネルギーに満ちています。



スメタナ／連作交響詩《わが祖国》より～祖国への愛から書き上げた奇跡の傑作～

1867年にオーストリアからハンガリーが分離して二重帝国となると、チェコ人の間でも自治や独立を求める気運が高まりました。連作交響詩《わが祖国》はこのような時代背景のなかに生み出されました。全6曲からなるこの連作交響詩は、スメタナが失聴という絶望の淵に立たされながら、祖国の風景や伝説を描きあげたものです。

第1曲「高い城（ヴィシェフラド）」

ハーブによって吟遊詩人が語るプラハの古代の城の栄光と没落が描かれます。この「高い城の動機」は、全曲を貫く重要なテーマです。

第2曲「モルダウ（ヴルタヴァ）」

水源の清らかな一滴から始まり、森の狩猟、村の結婚式、月光の下の水の精の踊りを経て、プラハへと流れ込む大河モルダウ（ヴルタヴァ）を描きます。クライマックスでは、「高い城の動機」が圧倒的なスケールで回帰し、川の物語がチェコの歴史そのものと昇華されます。



スメタナが指揮者を務めていたプラハ歌劇場のオーケストラにヴィオラ奏者として活動し、スメタナの生み出すチェコ音楽の息吹を体感していた若者がいました。肉屋を営む家に長男として生まれ、家業を継ぐために肉職人として修行を積む傍ら、音楽の才能を見出され、周囲の強い応援より音楽の道へ進んだ苦労人ドヴォルザーク（スメタナの17歳年下）です。

スメタナが土台を創り上げた「チェコ国民楽派」のバトンを受け取ったドヴォルザークは、伝統的な交響曲の枠組みと融合させ、「チェコ国民楽派」を世界中に支持されるものへと開花させました。本日のプログラムは、まさにこの「バトンの受け渡し」を体感していただける構成となっています。

ドヴォルザーク／交響曲第5番 へ長調 作品76～ドヴォルザークが拓いた新時代～

「新世界より」や第8番の影に隠れがちですが、この第5番はドヴォルザークの作曲家人生の最大の転換点となった作品です。

作曲された1875年、ドヴォルザークはオーストリア国家奨学金に合格し、審査員だったブラームスに見出されます。それまでの経済的困窮や、方向性の模索の時代を脱し、チェコ人としての音楽を確立した「チェコ音楽の夜明け」を象徴する交響曲です。

第1楽章はボヘミアののどかな田園風景を思わせる清々しい楽章です。哀愁を帯びたチェコの民族的な憂愁を感じさせる**第2楽章**はチェロが奏でるとこか寂しげで叙情的なメロディが印象的です。途切れることなく入る**第3楽章**はチェコの民俗舞踊を思わせるスケルツォと、中間部の木管楽器によるのチャリングな掛け合いが聴きどころです。**第4楽章**はエネルギー溢る歓喜です。

